

# 日常のささやかな ことを通して 世の中を考える

## 京都の町内の歴史を通して

都市という言葉を考えてとき、企業が多く集まっている空間であるとか、行政機能が整っている空間であるというイメージが先行して出てくるのではないのでしょうか。しかし、都市空間にはもうひとつ、居住する空間という要素があります。都市空間の中では、経済活動、行政機能、居住者の生活という3つが複雑に絡まり合っているわけです。

私の研究は、この都市の3つの要素の中で、そこに住んでいる人の生活という側面に焦点を当てて、その変

**奥田 以在**

Iari Okuda

【研究テーマ】

近代京都の都市史：都市  
コミュニティの歴史



化の過程を歴史的に明らかにしようというものです。もう少し具体的に言えば、京都の町内会規模のコミュニティである「町」（チョウと読みます）が、近代の都市インフラ整備や工業発展などの影響を受けてどのように変わっていくのかということを研究対象にしています。

ひとつの例として、インフラ整備と「町」の関係を考えてみます。京都の「町」というのは、道路を挟んだ両側の家々によって構成されています（両側町と言っています）。つまり、「町」の中央に道路が走っているわけです。そういう構造ですから、道路は「町」にとっての公共スペース、挨拶を交わしたりする「広場」のようなものと言っても良いでしょう。もし、道路の幅を広げて自動車や路面電車の交通の便を良くするための工事が行われれば、せっかくの「広場」は危険をはらんだ空間になってしまうわけです。それに加えて、個人の敷地や家屋敷を道路に変えなくてはならなくなります。町内の生活環境が一変してしまう様子を想像できます。

このような道路整備を行うことで都市交通の要所となった地域は、京都の中心街のように商業地として発展していきます。しかし、そのような変化の一方で、居住地としての性格は後退していき、夜には人の住まない「町」が出来上がってくるわけです。

たしかに、インフラ整備は都市生活の便利さを向上するために必要不可欠です。現在の我々もその恩恵にあずかっていることは言うまでもありません。しかし、そういったモノが出来上がってくる一方で、失われてしまっ



たこともあります。そのように考えると、都市で起こっている様々な事柄は、経済的立場、行政的立場、居住者の立場というそれぞれの立場からその意味を評価される必要があるわけです。さらに言えば、このように様々な視点から物事を捉えることが、将来の住みやすい都市空間の形成にも繋がっていくと考えています。皆さんのお住みになっている町がどういった歴史を辿ってきたのか、お調べになるときっと面白いだろうと思います。

## 職人さんに教わりながらものの価値を問い直す

私のもうひとつの関心は、ゼミのテーマにしている職人や老舗の方々の聞き取り調査です。先日、茶碗職人の研究をしていた学生たちが素晴らしいことを言っていました。調査に伺った際、そこで作られた湯呑み茶碗でお茶を頂いたそうなのですが、明らかに美味しく感じたというのです。お使いになっていた茶葉も良く、淹れ方も素晴らしいのだと思いますが、茶碗を手にした瞬間から「何か違う」という感覚があったと言います。その後研究を進めていくなかで、彼らはそれまで気付かなかった茶碗の魅力を知り、値打ちが少し分かるようになり、その茶碗を買うことにしたそうです。

この話を聞いたとき、調査に行ったゼミ生たちが、ものの価値について自らの経験の中からしっかり考え始めたと思ひ感動しました。ものには価値があります。しかし、その価値基準というのは物差しで簡単に測れるものではありません。価格というものは物差しのひとつでは

ありますが、この学生のように価格に対する考え方も、価値の捉え方で大きく変わります。自分の価値観とは何か、私も自分に問いかけつつ、学生の話を楽しみに聞いています。

ここでお話ししたことは、日常生活の何気ない瞬間の疑問や感動から考えを広げていますが、実のところ毎日の生活で何気なくやっていることだと思います。しかし、それを意識的に行うことで多くの発見があるわけです。このように、日常を意識的に捉えることが、実は我々にとっての暮らしやすさとは何かということを考えることであり、ものとの付き合い方や消費社会のあり方を問い直すことに繋がっていくのではないかと思います。皆さんも是非、自分の身の回りの何気ない日常から少し意識的に色々なことを考えてみて下さい。きっと色んな発見があり、疑問が湧いてくると思います。そしてそれを大切にしつつ、他の視点からも想像力を働かせて捉え直してみてください。それが社会を考える、世の中を考えるということに繋がっていくはずです。